

---

# 奴隷と迷宮とあと何か

男鹿

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

奴隷と迷宮とあと何か

### 【Nコード】

N2781BA

### 【作者名】

男鹿

### 【あらすじ】

いつの間にか転生を果たしていた主人公、カルマ。テンプレ通り、知識SUGEEEをやってみたところ奴隷という立場に落ちていた。だが彼は諦めない。持ち前の思考力と行動力で迷宮から冒険までこなして行き、最終的にはハーレム王に！なんてことになれたらいいな。

不定期更新 最強系 ハーレム が結構入っていますので注意を

奴隷はこうして始まった。(前書き)

始めまして 牡鹿です。

遅筆なので更新にいらいらするかもしれませんが楽しんでもらえるよう頑張ります。

奴隷はこうして始まった。

## 1 異端児

異端、というのはどの世界でも排除されるらしい。

それが俺、カルマのわずか八歳で知った現実だった。

俺が前世の記憶を持って転生してやってきたこの世界、名前は知らない。

何故って？

聞く前に捨てられたからだ。

勘違いしないでほしいのだが、俺の実際の親は立派な人だ。

どこかから流れてきた民のようで村では孤立していたが俺の覚えている限りでは優しく温かい人たちだった。

今は村の流行病で死んでしまったが、彼らが生きていたら俺の人生も変わっていたのだろう。

そんな俺が生まれたのは、それはもう小さな村だった。

日本のように過疎化が進み、若い人が少ない、そのせいで食べるものも無く商人も寄り付かない今にも寂れそうな村。

俺の両親はさつき言ったとおり既に死んでおり、生き残った俺も小さい時から新しい保護者に奴隷の様に扱われていた。

なまじ前世の記憶を持っているために頭がここの奴らよりいいので、手間がかからない働き蟻みたいな扱い。

迷宮やら王都やらに夢を追いかけていった若いやつらに代わって俺は馬車馬のように働いていた。

そんな俺の転機とも呼べる事件が起こったのが約一年前。

当時、村の近くで暴れていた盗賊団が攻めてきたときだった。

丁度その時しょぼい自警団は狩りに出ており、不在。

自警するためにいるんだらうって奴らがなんでもないんだよって思

うが、村は慢性的な食糧不足に陥っているからしょうがないっちゃしょうがない。

で、このままじゃ村は終わりじゃーとか村長さんが騒ぎ立てるので俺が一計案じることにしたのだ。

混乱している村長に俺の作戦、題して空城の計 割と有名な作戦をアレンジしたものを提案。

最初は相手にしてもらえないと思ったのだが俺の頭の良さが割りと広まっていたのか俺の必死の説明によって村長を頷かせることに成功。

そして八歳児とは思えない指揮によって、村の人達を避難させ、一部の男共は指定箇所へ誘導、設置し、まんまともぬけの殻となった村で強奪を働く盗賊三十人が油断した所を奇襲。  
あえなく不貞な輩はお縄となった。

まあこれだけ聞くと、なんだ簡単じゃんとか思われるけど、村の酒に睡眠薬を入れたり、馬酒香 馬や牛を酔わせる、マタビみたいな効果の香 を風上から炊かせて馬で逃げられないようにしたりと様々な工夫を凝らし成功確立を高めたのだ。

そしてこの件で一躍有名になった俺はこの村でなんと英雄扱いにされる なんてことはなかった。

今頃かよって、帰って来た自警団が騒がしい村の様子に気が付き村長に説明を求めたらしい。

村長はありのまま説明。

自警団のリーダーはありえないとか言って騒ぎ立てる。

わずか七歳の子供がおかしいだろーってなって、(まあそこは否定しないが)俺は何時の間にか忌み子に認定されていたわけだ。

別にこの判断はおかしいとは俺は思わなかった。

だって普通の七歳児はそもそもが少し物事を知ってるぐらいなんだぜ？

それを俺は言葉どころか大人ですら知らない知識を披露し、あまつさえ人殺しの手段まで考えだしてしまっただから。

正直やりすぎたなーとは思ってる。  
反省はしていないけどな。

現代日本では滅多に起こらない殺人事件とか強盗強姦が珍しくない世界。

そこで生き残るには多少無茶をしなくちゃ生き残れないのだ。

自分の居場所は自分で守る。それがこの世界の常識なのだ。

ただまあ 俺は結果的に村の村長権限と義理の親の後押しで奴隷になってしまったわけなのだが。

2

ゴトゴト、とあまり優しくない刺激が俺の尻を断続的に打ってくる。一際大きな揺れが馬車を襲い、浅い眠りについていていた俺の身体は無意識に跳ねた。

ぼやーとした視界と共に意識も覚醒していく。

奴隷として檻の中に入れられてもう二日、疲れからか俺は寝ていたようだ。

ただ精神的な疲れからか俺はあまり思い出したくない夢を見ていたらしい。

俺が奴隷になった理由とあの胸糞悪い村での話だ。

夢にまで出てくるとはなんて忌々しい……

このまま二度寝を決め込んでやろうかと思っただが、俺は馬車床の固い感触を思い出し断念した。

さて、俺があこの村を奴隷として出発して向かっているのは村より遠く離れたこちら辺ではもつとも大きい街である。

徒歩で一ヶ月。馬車で半月と行った所にあるため非常に俺としては辛いものがある。馬車は揺れるし、中は煤や垢で黒ずんでいるし、半月も過ぎすのにこの環境は大変参るものがある。食事もほんの僅かであるし、トイレも一日二回。

脱走しようにも檻に足かせみたいなのが巻きついていてまだ子供の

身体である俺にはとても外せるものではない。

暇を持て余してもやることといったら精々外の縁豊かな悠久な自然を眺めることぐらいか。

一応俺以外にも二人奴隷はいるが、一人は成人した痩せぎすな男であるし、もう一人もヒステリックそうな女であり、どちらも悲壮な目をしながらなにやらぶつぶつ言っているためとても話しかけられる雰囲気ではない。

御者である奴隷商人もいかにも悪人です、みたいなメタボ腹と脂ぎった顔したやがるし、話したいとも思わない。

しかしこの商人は行く村先々で奴隷を集めているようで、これから先、俺の退屈を紛らわせてくれる人が来てくれる可能性もあるかもしれない

本当は来ないほうがいいのだが、今の俺は狭い空間に閉じ込められているせいか人と話したくなってしまうががないのだ。

早く来い、と念じながら、俺はその機会が来るまで大人しく外の景色を眺めることにしたのだった。

更に二日が経った。

この日はなんと念願の話相手が馬車に乗りこんできた。

俺より少しだけ年下らしき少女である。

痩せすぎで頬がこけていて、見ているこっちが悲しくなる風貌だったが、ここら一帯の村は飢饉に襲われているという事情を考えれば納得も行く。

恐らくは村の口減らしと資金の確保として売られた娘なのだろう。可哀想だとも思うが、同じ俺に出来るのはせめて彼女の話相手になり、寂しさを和らげることぐらいだろう。

いや、別に俺がロリコンってわけじゃないから。  
いや、まじで。

幸いなことに身体が小さいもの同士だから同じ檻の中である。  
これを機にフラグをたててやるぜ！って意気込んだはいいものの……  
俺が話しかけると少女はなぜかギョロつとした目をこちらにむける  
だけで後は「うん……」とか「ううん……」ぐらいしか話してくれ  
ない。

うーん。言語障害ってわけでもなさそうだし。  
これは性格なものと、奴隷として売られた時のショックが重なった  
ものなのだろうか。

俺が近くになると直ぐに離れるし（とは言っても狭い檻の中なので  
あまり変わらないが）人間嫌いなのかもしいな。  
ただそれでも俺は彼女に一方的に話かけるけどね。

暇だし。

これから仲良くなっていけばいいと思う。  
俺はそう考えながら馬車の上で眠りについた。

次の日、今度はまた一人少女が馬車に乗り込んできた。

他にもなよつとしたおじさんが乗り込んできたがそいつは知らん。  
女の子と仲良くするのがリア充への近道なのだ。

乗ってきたのは目元が少しきつい感じのある気の強そうな少女。

赤髪ツインテールなのが更にグッドである。

早速俺は話しかけるが早々に無視された。

なんなんだろう。俺はそんなにキモいやつなのか。

急にリア充の道が遠のいた気がするぜ。

だが一回無視されたくらいで諦めないのが俺クオリティ。

ガンガン話しかけるが少女は常に無視。

ここまで来ると最早喋れなくなる呪いでもかかっているのではない  
のか。



最初の子よりも無口だ。  
改めて彼女の様子を伺う。

(ん……?)

ちよっとした違和感。

この子よくみると、顔が少し青いような……  
気のせいだろうか。

まあそれを言ったら明らかに栄養失調な緑髪な最初の子なんかもやばいしね。

多少の体調不良なんかは多めにみるしかない。

しかし、体調が悪いのなら無理に話すのはよくないだろう。

俺は会話を諦め眠りに付くことにしたのであった。

更に次の日。俺が奴隷になってから六日が経った。

今は夕食の時間である。

奴隷には一日に二度食事が配られる。

硬く、少しかびたパンと塩気もへったくれもない干し肉、それと少々の水。

正直これから成長しなくてはいけない時期にこれだけの量しか食事が与えられないと言うのは中々にきついものがある。

だが、それより俺が心配なのは緑髪のこの子。

もともとガリガリに痩せていて体力は無さそうだったのだが、ここ最近の馬車生活のせいかなかなり体力を消耗してきているみたいだった。

水以外は床に直接置かれた食事をゆっくりと味わうように食べているのだが、やはりそれでは足りないのか。

食べ終えても気の毒なほどにお腹を鳴らし悲しそうな顔をするのだ。その顔が前世で見かけた、骨と皮だけになってしまった飢えた野良犬の姿に被ってしまったって忍びなく思えてきてしまった。

妹がいた身としてもこれはほつとけない。

どうしても兄としての庇護欲がうずうずと出てしまう。

だからだろうか、俺も相当限界なのだが彼女に俺のパンを与えてやった。

目の前に差し出されたパンを見て、最初彼女は困惑しているようだった。

俺とパン、交互に視線を移し、自分に何を求めているのか分からなかったのだろう。

まあ俺もただでさえ少ない食事を分け与えている奴をみかけたら気がおかしくなっただろうと思うよ。

だからこれは気のおかしい奴の奇行。 ただの自己満足である。

俺は未だパンに手をつけない少女に一言、食べな、とだけ告げた。

少女はしばらく俺の顔をじっと眺めた後、しばらくして静かにパンを口に入れた。

……それも泣きながら。

少しびっくりしたが、少女もいきなり家族と離され奴隷として連れて来られて不安だったんだろう。

そしてちよつとした親切で緊張状態が瓦解したに違いない。

俺は静かに少女の頭を撫でてやった。

一瞬びくつ、と震えたが何とか抵抗されずになでさせてもらった。

しばらく撫でていると、何とすりすり俺の膝の上に乗って腰に抱きついてきた。

か、可愛い。

なんだかんだで親や兄弟に甘えたい年頃だ。

俺がパンを与えたことに心を開いてくれたのかもしれない。

うん、これだけでも少しはパンをあげた甲斐があったというものだ。 ついつい頬が緩んでしまう。

これからも食事を分けてあげようと思った。

だが、俺達のこの美しい光景に異を唱えるものがいた。

……赤髪ツインテールの少女だった。

初めて聞いた声はりいん、と鈴が鳴るような声音。

涼しげで心地良い音というべきだろうか。

しかし、その人を癒す声色とは裏腹に彼女の口から発された言葉は随分と辛辣なものだった。

曰く　私の前でくだらない茶番はやめて、と

どうやら何か彼女が彼女の琴線に触れてしまったようだ。

普段より数段鋭さが増した瞳をこちらに向けてくる。

その鋭利な視線を受けて、腕の中にいた少女は隠れるように俺の胸に顔を埋める。　子供は雰囲気を感じ取りやすいため、俺と金髪の間に流れる空気に不穏なものが混じったのを感じ取ったのだろう。

俺は大丈夫と言いつ聞かせるように少女を抱きしめる腕の力を強めた。そして金髪の方に改めて視線を向ける。

自然とにらみ合う形になる。

自分より少し年上の少女。

気が強そうというイメージは崩れていないが、ここまで喧嘩早い性格とは思っていなかった。

俺が話しかけたときも、うざい、と一蹴するわけでもなく冷静にスルーしていたためもう少し理知的な印象を受けていたのだ。

だが、今はどうだろうか。

彼女の瞳は猛烈な怒りに燃えている。

全てを憎み、この世に信じられるものなど何もないと疑わない目。

俺とこの小さな子をまるで親の仇のごとく見つめる彼女は最初感じた理知的という雰囲気は一切感じない。

俺は、その威圧する目に負けじと問う。

何故そんなことを言うんだと。

だが俺のちっぽけな奮闘虚しく、彼女はただ睨み付けるだけだった。

口にすることすら不興ということか……

それとも彼女自身もこれが単に奴当たりというのが分かってこれ以上無様な姿を見せたくないか。

何ともこの世界の子供というのは子供にしては成熟した精神をもっているものだ。

安定した生活が保障された日本と違い、毎日が心を磨き上げる、密度の濃い日常ということか。

もっとも磨きすぎてすり減ってしまっている感が否めないが……。ただこれ以上は埒が明かない。

にらみ合うというのも中々に体力を使うので俺は肩の力を抜くと、まだこちらにキツイ視線を向ける彼女に背を向けて寝転がる。

その際、俺の腰にしがみついているいつの間にか寝ていた少女も横に寝かせ、腕枕をしてやる。

とりあえずこの子と仲良くなれたことが今日の収穫のようだ。

俺は後ろの赤髪に、お前も寝れば、と声をかけてから目を瞑った。赤髪の反応も見てみたかったが、それより先に眠気が襲ってきた。

俺はそれに逆らわずに意識を手放した。

## 馬車生活十日目

この日はこの辺で少し大きい村に到着した。

だが俺達は馬車の中で基本待機。

メタボ野郎は奴隷の買い付けに村の中に入っていく。

恐らく村長らへんと交渉しているのだろう。

前にも話したがここ最近、大雨や異常な害虫の発生、急激な気候の変化などの要因により軽く飢饉状態に付近の村は陥っている。

その為食料は蓄えから切り崩すか、外から商人が運んできた物を買うしかないのだが、殆どの村でこの事態が起きているので物価の上昇が著しい。

村にある金では限界があるのだ。

そこで奴隷が売られる。

村から労働力にならない若い女や年老いた男を売り、金を増やし、更に口減らしの効果も得ようというのだ。

そして飢饉の今、奴隷に落ちるものは多く奴隷の価値は相対的に下がる。

奴隷の仕入れ時としては大変都合がいい時期とも言えるのだ。

あのメタボ男がこうして長期間村を回り奴隷を集めているのも他の奴隷商人に先を越されないように必死なのだろうと思われる。

慢性的に不足している奴隷は他の地域に連れて行けば高く売れるのだ。

本来ならここらを治めている領主が飢饉対策（村に何らかの金銭的支援もしくは物質的支援）をとっていてもおかしくないのだが、この領主、魔の領域が近くに存在するため実に吝嗇家という噂であり、それは真実らしい。

緑髪の子　名前はノーレというらしい　に証明されるように、ちらほらと見えるここの住人も肉付きがいいとは決していえない。赤髪ツインもノーレほど酷くはないが痩せている。

そうそう赤髪ツインと言えば最近彼女は何かと嫌がらせに近いことを俺達にしてくる。

俺とノーレがいちやいちゃしていると暴言を吐いてきたり、トイレ休憩の際にはわざとよるめいて腹にブローを決めてきたり。

何もしていない時でも俺達を何かと睨み付けてくる。思わず、やんのかゴラァ！と怒鳴りたくなるぐらいだ。

やるとノーレが怯えそうなのでやらないが。

とまあ何かとやりたい放題の彼女なのだが今日はどうもおかしい。

日に日に顔が青くなっていくなあとは思っていたが、今日のは明らか

かに様子が違った。

顔に苦悶の表情を浮かべ、何かを耐えるように歯を食いしばっている。

わずかにだが咳もしている。

これはもう何かの病気が進行している可能性が高い。

どうかしようにもあのメタボはここにはいないし。

そもそも奴隷という立場が医者に掛かるということを許しはしない。メリットとデメリット。

この場合赤髪に医者呼び高い金を払うというデメリットを背負ってまで、病気を治すメリットがあるか。

俺の予想ではメタボ腹は医者呼ばない可能性が高い。

あのタイプは後々得られる利益よりも目先の利益と損害に目が行くタイプだ。

護衛が冒険者二人しかいないことからもけち臭い性格をしていると分かる。

しかし、医者にいけないとなるとどうするか。

と、俺が思考し始めた所で、赤髪が何かを咳と共に吐き出した。床を赤く染めるそれ。

それは俺達に最も身近だけれどあまり見る機会のない液体。

赤黒く光る血だった。

これには流石に無感情な奴隷さん達も驚いたみたいで、小さく悲鳴を上げる者もいた。

赤髪はしかしそんな反応など気にしていないかのように、床に垂れた血を眺め、次に手の甲で口元を拭くと、寝転がってしまふ。

俺が大丈夫か、と問いかけても無視。

軽く肩を揺すっても無視。

耳に息を吹きかけたら……殴られた。

……痛い。

とりあえず、彼女はこの現状に対して特に何も思っていないみたいである。

それこそ、死ぬんなら死んでもいいや、みたいな諦めの感情が伺えた。

彼女の人生に何があったかは知らない。

奴隷として捨てられるのだからよほど辛い思いをしてきたのだろう。だけでも、まだ幼いこの子が死を望むというのはどうも許せなかった。

それに確実ではないが彼女の病気の正体は分かった。

顔色の悪さ、風邪の症状、痛みを我慢してるような表情、そしてさつき近くに寄った時見えた内出血のような斑点。

ここから導き出される症状は恐らく壊血病

ビタミンCの不足により発症し、果物や野菜が取れない海賊や航海士達が多く罹り死んでいった病気だ。

この地帯を覆う飢饉。干し肉や味のしないスープなんかだけで過ごしていたなら珍しくもない病気ではある。

しかし、治すのは簡単で、ビタミンCを多く含む食物を取ればいいのだが……いかんせんここらじゃ野菜や果物一つとっても貴重であり高価だ。

救えないわけではないのだが……

と、そこまで考えてため息ひとつ。

(こんな所で使うはずじゃなかったんだけどな……)

本来なら俺が奴隷として売られないために、交渉材料として使うはずだった物。

普通に持っていたら確実に回収されてしまったため、口の中に入れて隠していた豆粒大の宝石を俺は手の上に吐き出した。

それを見て腰にしがみついていたノーレが目を見開く。

これを知っているとは中々博識な子だ。

俺が持っている宝石のようなこれ、名を【神力結晶】という。迷宮や自然界に極々一部湧出し、これを摂取することにより寿命が延びるといふ不思議な石だ。大きさにより効果の大小が違つたため、売値はピンきりだが、このぐらゐの大きさなら果物や野菜を買つたとしてもお釣りが山ほどくる代物である。

ふむ……。

これを交渉に使えば彼女の病氣は治るだろうが、俺は奴隷から抜け出せない。

逆に彼女を見殺しにすれば俺は助かるわけだが。

ここで彼女を助けられないのはナンセンス、信条に反する。

まあ確立は低くなるがまだ脱走する方法はない訳ではないし、人命優先といつておこつか。

そう頭で結論を出した俺はとりあえずメタボの帰還を待つのだつた。

## 馬車生活十二日目

結論から言えば、赤髪は助かつた。

この世界にはビタミンCが多く含まれる【スコの実】というのがあつるのだが、その瓶詰めを購入させ、彼女に定期的に摂取させることには成功した。

その際に予想通りといえはそうなんだが少し大立ち回りを演じ、今の俺は顔面あざだらけである。

あのメタボめ……いつかボコボコにしてやる。

とまあ、久しぶりに身体を張つたおかげかその見返りというものはあつた。

赤髪が俺の看病をしてくれるようになったことだ。

それは自分のせいで俺が殴られたという罪悪感からもあるのだろう



が、時折見せる笑顔はこちらに心を開いてくれたという証だと思いたい。

看病をどちらがやるかでノーレと喧嘩するのは止めて欲しいが……一昨日から考えればまあ、信じられない進歩とも言えよう。人間の歴史は戦いの歴史であるってな。

そういえばもう一人仲間が増えた。

名前はミラ。 肩まで金髪を伸ばした薄幸の美少女である。

この娘を連れて来たときメタボがニヤニヤしていたことから余程いい買い物なのだったのか、どうも訳ありっぽい少女である。

年は十二ぐらいで俺達の中では一番上であり、おっとりとした雰囲気が大入りびた印象を感じさせる。

彼女はノーレやアイシャ 赤髪の名前である と違い、こちらに敵愾心とも言うべき反抗的な感情は見せず、最初から柔らかくこちらに接してくれた。

肉体攻撃までしてきたアイシャとは大違いである。

ちよっ……痛ッ。 目は！ 目は止めて！

と俺達がじゃれついてもミラは終始笑顔である。

狭い檻にいても不満顔を一切見せず、笑顔でいるミラは確かに表面上を見れば穏やかで何の問題のない様に見える。

だが、俺の中ではどうも違和感が拭えなかった。

奴隷という最悪な人生に落とされたものなら本来、ノーレやアイシャの反応の方が人間としては正常であるのだ。

怒り、嘆き、悲しみ、諦める。

人間として正しい状況に対して正しい感情の発露があっただけであるべきであり、矛盾した感情と行動は人間として歪んでいると言ってもいい。

彼女の笑顔はまるで顔面に薄いマスクでも貼り付けたように空虚であるように感じるのだ。

心の中では何かの感情を秘めているのに、表情は真逆を表しているとても言えばいいか。

こういうタイプは本当の意味で心を開いてくれることが難しい。半ば、自分でも本当の気持ちに気づいていないのでいくら、無理すんなよ、とかイケメン的なことを言っても、何が？、で返されることが多い。

ここはしばし静観か。

なんだか目的が女の子を攻略することになってきている気がするが、これも辛い馬車生活をハーレムうはうは状態に持つてくには必要なことなのだ、とか自分を納得させながら今日も俺は眠りにつく。

## 馬車生活十三日目

俺が目を覚ましたのはまだ日も出ていない明け方だった。

いつもと違う、金属がこすれる音やぱたと軽いものが地面を叩く音によって無理やり覚醒させられたのだ。

(なんだ……?)

勘でしかないが無性に嫌な予感がする……。

俺が気になってノーレ達を起こそうとした時それは、始まった。バシユツ、という空気の切れる音。

それを皮切りに、次々と馬車の幌から突き出してくる矢じり。

それが開戦の狼煙だった。

一斉にパタパタという軽い足音がこちらに迫ってくる。

それと同時に金属と金属が打ち合ったような甲高い音が暗い馬車の中に響き渡る。

その音で他の奴隷たちも目覚めたようだ。

いかにも眠そうにしながら皆、何事かと戸惑っている。

ノーレやアイシャは子供だからか、まだ寝ぼけ眼をこすっているが。

俺は現状把握の為に身体を捻り狭い檻の中で立ち上がると、打ち込まれた矢によって作られた馬車布の切れ目から外を覗いた。そこにいたのは、この長い旅が始まってから護衛として付いていた二人の男と、

（緑色の人間……？ ゴブリンか！）

緑色の肉体と醜悪な顔。

チンパンジー並みの知能を持ち、小柄ながら腕力に優れた魔物。複数で行動する為に、こちらに全体攻撃のできる魔法やスキルを使える相手がいないと相手をするにはきついと言われている。

ここの近くには、魔の領域があると昨日メタボが言っていたことから、奴らはそこから略奪に来たのだろう。

再び、切れ目から外を覗く。

ゴブリンの数は詳しく分からないが、およそ十五。

それに対し、こちらの護衛は二人。

彼らがよほど腕っ節に優れていない限り、結果は絶望的だった。

それに加え護衛の二人は何本か矢を食らっているようだ。

恐らく最初の奇襲の際、不意をうって攻撃をくらってしまったのだと推測。

この時点でもうだめだと判断した。

そんな二人の健闘を観戦し始めて二分。

とうとう彼らは大量の出血による影響からか膝をつき、その隙を狙われゴブリンに首を落とされた。

ころころ、と転がっていく首は何とも俺達の行く末を暗喩しているようで暗鬱な気分になる。

そして魔の手は俺達にも及んだ。

一匹のゴブリンが馬車の幌を手にした粗末なブロードソードで切り裂いていく。

そして開いた口から乗り込んでくるとその剣で男どもの首を刎ねる。

ゴブリンにとって必要なのは人族の女性であって男性ではない。基本的にゴブリン種のような人型の魔物は人型の動物を食用にしないため、繁殖に使えない男性は捕獲対象にならないのだ。

ゴブリンは次々に悲鳴を上げて抵抗する男性を殺していく。

その中にはあのメタボも含まれていたが奴の準備不足が招いたことなので自業自得としか言いようが無い。

この三流スプラッタの様な惨劇、ノーレとアイシャには刺激が強すぎたようで今にも気絶しそうな程真っ青になっている。

しかし阿鼻叫喚がデフォルトとなった俺の視界の中に一つだけ異質なものが混じっていた。

薄幸の美少女、ミラだ。

彼女のいつもニコニコとした笑顔は確かに普段の日常では自然なものとして万人に受け入れられるだろう。

俺も普通の出会いをしていたら彼女の蕩けるような笑みにほだされていたかもしれない。

だが　この状況で笑顔でいられるのは異常だ。

首が飛び足がちぎれ血臭濃く漂う馬車内において、歴戦の戦士ならともかくただの小娘が冷静でいられる確立が何パーセントあるだろうか。

ただ一つ言えることは彼女は壊れかかっているということだけ。

人間の思い込みというのは実に厄介なものであり、一回自分はこうであると定義してしまえば中々変更が効かないということだ。

こんなのは自分のキャラじゃない、自分はもつとこうあるべきなのになどと思ったことはないだろうか。

だが性格を変えることはできずに悩んだことはないだろうか。

ころころと性格が変わるのは情緒不安定でしかないが、彼女はむし

る情緒固定になってしまっている。  
笑顔でいることを己のあるべき姿、本当の自分だとおもいこんでいる。

そこから考えられるのは、彼女はいつもか笑顔で過ごさなければいけない生活を送ってきたということだ。

奴隷になる様な人達はそれぞれ重い過去を背負っている。

それは分かるし納得しなくてはいけないのだろう。

だがこのまま彼女が壊れていくのを黙って見ていられるような器用な性格をしていないのが俺だ。

本当ならゆつくりと彼女を自然体に戻していくのがいいのだろうが、生憎と今は未曾有のピンチ。

俺の命すら危ういこの状況で女の子のことを考えているのはなんとも暢気なものだと我ながら思うが性分なので仕方がない。

ピンチはチャンスとも言出し、いつその状況、上手くすれば奴隷からも脱せるしミラの凝り固まった心も戻せるかもしれない。

フッフ、と久しぶりに頭の中で黒い笑いがにじみ出る。

ああ、実に愉快だ。

前世も相当スリルに満ちていたが流石にリアルファンタジーには敵うまい。

命がけの状況での女の子とのロマンス、最高じゃないか！

この時の俺はテンションが上がっていた。

上がりに上がりすぎて忘れていたのだ。

今の俺の身体は七才児のそれであり、檻に鎖で繋がれているという状況を。

そして

ゴツッ！

今まさにゴブリンが周りの男共を蹂躪しているというのに、自分も

男の部類に入っていたということ……

ゴブリンに頭を殴られ薄れ行く意識の中、俺は『計画通り』と強がってみることしかできなかった。

## 野宿生活半日目

ざつざと草木を掻き分ける音が薄暗い森の中に木霊する。

上空から鳥類種の魔物の鳴き声が空気を揺らし、昆虫種の魔物は獲物を狩らんと

気配を断ち、目を光らせている。

ここはアルベイル王国とカーミナル帝国の北部、両国間を挟むように位置している魔の領域《万物の森》。

大陸一の規模を誇るこの森はその名の通り資源に恵まれているが、それに比例して魔物の数も異様に多く未だ人類未踏の森として名高い。

カルマ達を襲ったゴブリンもここに多く生息し、襲った人間や食料はここに運び込まれ彼らの糧として蓄えられている。

そしてカルマ達を襲ったゴブリン達も例外ではなく、巢に戦利品を持ち帰るためにこの森の中を進んでいた。

雑然とした隊列を組む彼らの行進は久しぶりの大物により興奮しているのか遅々としているがそれに余りあうほど士気が高いものとなっている。

ギーギーと叫びながらちらちらと捕らえた女性奴隷達をちらちら眺めていることから今から彼女達を犯す光景を想像して楽しんでいるのかもしれない。

だが彼らはひとつ森に住むに辺り重要視しなくてはいけないことを

忘れていた。

ただでさえ魔物の世界は弱肉強食。ちよつとした油断が命の危険を招き、刹那の隙があつさりと魂をを刈り取るのだ

。この時のゴブリン達はは隙だらけといつても過言ではなかった。最低でも武器を持ち警戒態勢を敷きながら進むべきであつた。極上の獲物があるならば。

最初に異変に気づいたのは小腹が空いたために隊列から少しずれ、木に突つていた果物を齧つていた雄のゴブリンだつた。

必死に木にしがみついて果物を取ろうとしていた瞬間、すぐ側で風切り音が鳴つたのだ。

何が起きたのかとまだ年若いゴブリンは戸惑い、次に地面に刺さつた矢を見てようやく事態を理解した。

咄嗟に仲間知らせようと叫ぼうとしたが、それは叶わなかつた。反応が遅れた彼の頭部には既に二本目の矢が突き刺さり、その命を終わらせていたからだ。

次に危機を感じ取つたのは最後尾にいたゴブリン達だつた。

ぎゃーぎゃーと仲間と騒いでいたところに大量の矢が打ち込まれたのだ。

これには前方にしか注意を向けていなかったゴブリン達には対応することが出来なかつた。

一匹また一匹と倒れていく中でこの時やつと敵襲に気がついたゴブリン達は警戒態勢になつた。

もう姿を隠す必要なくなつたのだらう。

ゴブリンを囲むように敵の姿が木陰から現れる。

豚に似た醜悪な顔、ゴブリンよりも二周りでかい茶色の体軀。

口からよだれをたらたらとらしているその姿は正しく、ゴブリン

達の天敵とも言えるオーク種であった。

「ンゴ、ンゴッ！ ブヒ！（包囲を固めたまま徐々に陣を縮小也）！」

『ブヒーツ！！！！！』 翻訳はイメージです

リーダー格と思しきオークが咆えるとそれに答えるように周りのオーク達も雄叫びを上げる。

手に持ったぼろぼろの槍と剣を使い、ゴブリン達を徐々に葬っていく。

だがゴブリン達もいつまでも呆けていることは無い。

「ギギッ！ オレヲチュウシンニミツシユウタイケイダ。イッテン  
トツパデホウイヲヌケルゾ」

『ギイ！』 ゴブリンが喋ってるのはゴブリン語です。

直ぐにこちらのリーダー格も的確な指示を部下たちに出し、行動を促した。

「ギギッ！ イクゾ！」

リーダーと奴隷を中心に集まり、一直線にオークの包囲を抜けるために駆け出した。

敵に囲まれた場合圧倒的な武力差が無い限り、その場に留まることはジリ貧に陥り死に繋がる。

故に、戦力を一点突破しオーク達の囲いを抜けるのは正しいことだろう。

それは知能が足りない魔人種が野生の中で身に着けた戦術だ。

だが、やはりゴブリンではそれから先の一手二手を読むことは難しい。



必死の陣で包囲を抜けた先に待っていたのは、餓狼<の群れだった。

> 餓狼<は決して自分達からは攻撃を仕掛けない。

魔物達が戦っている所を遠くから眺め、両者が弱った隙を狙い牙を突き立てて漁夫の利を得るといふ狡猾な種族だ。

今回も血の匂いを嗅ぎ付けオークとゴブリンの戦場を伺っていたのだ。

オークの襲撃で弱っていた所に、> 餓狼<の襲撃を受けたゴブリン達は混乱した。

密集形態を維持できなくなり個々に散開する。

そこにゴブリンを追ってきたオークも参戦し、三者入り混じった乱戦になった。

カルマの目が覚めたとき、そこは先程と同じく戦場だった。

狼がゴブリンの腕に食らい付き、オークが二匹とも叩き潰す。

かと思えば、そのオークに数匹の狼が襲い掛かり数の暴力で肉を引き裂いていく。

当に弱肉強食。

動物の原初ともいえる光景がそこには在った。

いきなりの光景に驚いたカルマだったが、それよりも気になったのは自分の置かれている状況だった。

ゴブリンに頭を殴られたのまでは分かる。

だがそれならば何故自分は死んでいないのか。

男は不要、と首を切り捨てられるはずだった運命はどこで変わったのか。

とシリアスに考えてみるが、まあどうせ性欲満点のゴブリンなのだ。

シヨタも範囲内なのだとカルマは判断した。

そして次にするのはノーレ達の生存確認だ。

今、カルマはどこかの森の木の根元に投げ出された形で転がっていた。

奴隷よりは自分の命だとゴブリンに判断され、足手まといでしかない彼らは放りだされたのだろう。

そうなるると他の女性奴隷たちも同じように辺りに転がっている可能性が高い。

カルマは持ち前の柔軟さで直ぐに状況に対応すると馬車の中で仲良くなつた女子たちの行方を捜す。

ゴブリン達の死体が多く見られることからここら付近に彼女達がいるのは間違いないだろ。

案の定、ノーレとアイシャは直ぐに見つかった。

カルマが寝ていた場所から十メートルほどの所に捕らえられた女性達はまとめて転がされていたからだ。

だがノーレとアイシャ意外は助ける余裕は無い。

「おーい、起きろ」

二人の頬を叩く。

本当は叫んで起こしたかったが、ここで大声を出すことは魔物たちをひきつけることを意味する。

「う……ん」

「くっ……」

頬にはしる痛みに反応したのか二人がうめき声を上げる。

「おら起きろ」

「あれ……お兄、様。……もう、あさ？」

「寝ぼけてないでさっさと起きろノーレ。結構ピンチなんだ俺達」

「……もう、なに？ あたしの眠りを妨げるってことは死を意味するのよ」

「お前は相変わらず寝起きから物騒ですねアイシャさん。いいからさっさと起きろ」

ごねる二人を急かし、今の状況を簡潔に説明する。

二人はおぼろげに現状を確認すると、カルマにどうすればいいかを聞いてくる。

二人のなかではすっかり頼れる存在として確立されているのだ。

「まずはミラの発見。恐らくそう離れた場所にはいないはずだ。

次にこの魔物

達の突破だけどこっちは俺に奥の手があるから心配するな」

カルマは不安そうにしている二人を安心させるように自身満々に微笑む。

「うん……。お兄様の、こと信、じる」

「……まあ、あんたがそう言うんなら私も信じるわ」

「ああ、任せとけ」

カルマは一つ頷くと、ミラを探すために小走りでも木と木の間を縫うように先行する。

二人もカルマの後ろをなぞるように付いていく。

魔物の森で生き残る為の作戦が始まった。

奴隷はこうして始まった。(後書き)

結構適当に書いてるので病気名とか症状はあんまりは気にしないで  
もらえると助かります。

## ミラはこうして笑い出す（前書き）

ちよつと一章は自分の文章や心情変化とかの練習したいので結構遠回りします。

迷宮や最強になるのはまだ先になるのでそれを期待してください方はすみません。

あと、何分小説を書くのは初めてなので心情とかおかしい所あるかも知れないですけど練習なのであまり気にしないでください。

ミラはじつして笑い出す

ミラ・ローライト。

それが彼女に与えられた名前だった。

この国で、苗字があるということは貴族の証であるが、奴隷となつた今ではただのミラである。

もつとも、彼女の母親はこの地方を治める領主の妾であるために、貴族と言つても末席であり大した権力を持たなかったが。

そんな生まれであつたからか、彼女の人生に自由はなく生活はまさしく窮屈と呼べるものだった。

正妻や他の妾達との間に起こる醜い女の争いに巻き込まれた。

表に出れば日陰の女とその子供として後ろ指を指された。

時には父の政敵相手から内偵にならないかと遠まわしに誘われ、母がその誘いを断つたことで誘拐されそうにもなった。

だが、そんな辛い時でも母がいれば耐えられた。

暗君として名高い父は噂どおり頼りにならない状況の中、母だけがミラの支えだったのだ。

……母が殺されるあの日まで。

変化が起きたのはミラが九歳の時であった。

父の正妻が流行病で亡くなったのだ。

貴族の息女特有の高慢さと横柄な態度持ち合わせていた人だったので一時期は妾の間でも密かに吉報として伝わったのだが、それは間違いだつたとミラ達は知る。

貴族の正妻が死ぬと、妾のうちの誰かが正妻になるのか、と言うとそうではない。

貴族はあくまで貴族同士との婚礼を重んじ、血による絆を強めることを優先する。勿論、稀に平民から妻になる人も現れるが、多くは周りの人間の反対があつたり社交場での貴族からの陰口や嫌がらせに妻の方が耐えられなくなってしまふこともあつたりとデメリツトが多いためほとんど事例がないが。

そしてまだ若い領主には新しい貴族の女が嫁いできたのだが、これが酷かつた。

伯爵の娘とかいう触れ込みで、前妻よりも輪をかけて高飛車な性格だったのだ。

その性格は一言でいえば苛烈。まず非常に嫉妬深い。

無駄に傲慢な性格をしているため、夫が他の女に目を移すのが許せないのだ。

そしてお金にうるさい。

ただでさえ財力が乏しい辺境領主が無駄なお金を使うことを嫌つた。

故に、妾達が追い出されるまでに時間はかからなかつた。

妾を養うのもただではない。

見栄で貴族の甲斐性も見せなければいけないので、中々に費用がかさむのだ。

正妻はそれを嫌い、伯爵の娘という後ろ盾をちらつかせ一喝して妾たちを追い出したのだ。

ただ一人、ミラの母を除いて……。

ミラの母は特に領主の寵愛を受けていた。妾の間で子供がいるのもミラの母だけだ。そのため領主が妻の要求に例外として、ミラの母を追い出さないことを条件にしたのだ。

これに妻は渋ったがあまりに懇願してくる領主に難を示しながら承諾。

ミラとその母親だけは屋敷に留まったのだった。

母が倒れたのはその一カ月後だった。

あまりにも急な母の変容。

医師の診断では母は現代の医療では治せない病らしい。

だがミラは見た。

あの苛烈な後妻が、父が母の病室を退室した後、ミラが幼いのをいいことに目の前でこっそりと医師に袖の下を渡したところを。

九歳の頭では、優秀であるといってもそれが賄賂とはおおよびもつかない。

母が無き今では想像しかできないが、恐らくあの女は母に徐々に毒を盛り医者と結託して病名と原因を父にごまかしていたのだと。

母は次第に痩せ、具合は日に日に悪くなっていった。

それを涙ぐみながらただ見つめるだけしかできないミラに、母は微笑みながら「笑って」とだけ告げる。

笑っていれば、どんなに辛くても世界は美しくみえるものだ。

母の口癖だった。

それは父に見初められ、ほぼ強制的に妾にされた母のかくされた想



いだったのか。

そんな、大人にとっては陳腐に聞こえる言葉であっても母しか頼るものしかいなかったミラに大きな影響を与えるのは必然といえた。

毎日、「笑って」と告げる母のために、ミラは精一杯笑いを作る。

その笑顔を見て笑顔になる母のために、また笑う。

その繰り返し。

やがてミラは常に笑みを作るようになっていった。

結局亡くなる最期まで母は「笑って」とミラに囁き続けた。

だがミラの苦難は終わらなかった。

むしろこれからが本番であった。

母という後ろ盾を失ったミラに後妻からの虐待を防ぐ術は無い。

後妻はミラも殺そうと考えたらしいが、ただでさえ母が倒れたばかりなのだ。

ミラにも毒を盛ってしまえば、領主や周りに勘付かれてしまつかもしれない。

それを嫌った後妻はミラを虐待することでうさを晴らしていた。

余程、領主お気に入りミラの母に嫉妬していたのか、彼女の面影を色濃く残すミラに対する虐待は激しいものだった。

床に無理やり座らされ、撒き散らされた残飯のような食事を犬のように食べさせられることがほぼ当たり前になった。

冬空の下、紅茶をこぼしたミラに教育という名目で裸で放り出したこともあった。

その度に涙がでそうになった。

口から怨嗟の聲が出そうになった。

そんな辛い日々の中頭に浮かんだのは母の口癖だった。

「どんなに辛くても笑ってさえいれば耐えられるから。」

幼いミラはその言葉に縋るしかなかった。

何度も何度も口のなかでその言葉を転がし、呟く。

笑っていれば辛くないから、と。

それは口癖を通り越して自己暗示の領域まで達していた。

次第に彼女の中で世界はかわる。

世界の中に辛いものはないんだと。

父は薄々虐待に勘付いていたらしいが妻に逆らえないのか、何も干渉してこない。

前妻の忘れ形見である、ミラの二つ年上の領主の息子も昔は遊び相手として仲が良かったが後妻のとぼちちりを受けるのを恐れて話しかけてすらこない。

だが、そんな周りに味方がいない孤独な状況でもミラは笑っていた。いや、辛いからこそ笑っていた。

物置小屋に閉じ込められた時でも。

散歩と称し、魔物が生息する森に連れて行かれた際に置き去りにされた時も。

ただ、ミラは笑っていた。

時には、その笑みが気持ち悪いというのが原因で暴力を受けたこともあった。

それでもミラは笑うのをやめなかった。  
亡くなる間際まで聞かされた母との約束を守るために。  
絶対の存在である母の言うことは真実なのだと証明するように。  
しかし僅か十歳の少女が酷い虐待に耐えられるはずもなく、むしろ  
その行為が彼女に歪を作っていたことに気づかぬまま。

またもや事態が変わったのはミラが11歳の時だった。  
とうとう痺れを切らした後妻が虐待で弱ったミラに療養という名目  
で近くにある大きな村の村長の家に預けたのだ。  
その頃から飢饉の気配があり、正直貴族の娘を受け入れるのは迷惑  
だったが領主からの頼みに村長も断れず、ミラを受け入れた。

最初はミラの器量の良さとその愛想の良さに、迷惑ながらも内心孫  
ができたみたいだと喜ぶ村長夫婦。  
将来有望な容姿の彼女に唾をつけようとしている男性が多かったの  
だが、その異常性に気づくのは早かった。

村に魔物が入り込んだときがあったのだが、その際運悪く、年が近  
い男の子に誘われ共に歩いていたミラは襲われたのだ。  
常駐している領主の騎士団員が魔物を切り伏せたのだが、不幸なこ  
とにミラは軽症、友人は重症を負ってしまった。  
急いで駆け付いた村長は血をだらだらと流す男の子、次にミラに目  
を移したがそこにあったのは 目の前で友人が瀕死だというのに  
薄い笑みを浮かばせるミラの姿だったという。

その日から、ミラは不気味な子供として村から恐れられた。

そして、運命の日。

飢饉に喘ぐ村は、村長を筆頭として領主に税の軽減や各種援助を求めていたが中々返事は返ってこない。

このままでは大人たちはいいがまだ幼い子供達は死ぬ者も出てくるだろう。

村長がそう考えたときそこにあらわれたのが、丸々と太った奴隷商人を名乗るものだった。

商人は、今からでもその美貌の片鱗をうかがわせるミラを売ってくれば成人男性の十倍は出すという好条件を村長に持ちかけた。

村長はすぐにその商談に飛びついたが、ミラは貴族から預かった子である。売るなんて真似は到底出来ない。

そのことを話すと、奴隷商人は笑いながら魔物に襲われたとでも言えればいいじゃないかと村長を諭した。

遺体を渡せと言われても、もうほとんど食い尽くされた後であり証拠は服ぐらいしかない、と言ってしまえばこっちのものであると。

嫡子なら確かにまずいだろうが所詮ミラは妾の子。

新しく領主の妻になった女の噂を聞けば、責任問題など有って無きに等しいと商人は言葉巧みに持ちかけた。

その言葉を聞いて村長は熟考する。

ミラは不気味な子として村では気味悪がられている。

奴隷として売っても一部から反対は出るだろうが、多くは無言で受け入れるだろう。

成人男性十人分ということはその分人を売らなくていいということだ。

労働力が少しでも欲しい今、村の利益とミラー一人の命どちらが重いかは明白だった。

村長は決断を下す。

奴隷になるということを聞いてもミラは変わらなかった。

「すまん。悪いとは思うがこうするしか方法がないんだ……許してくれ」

ミラに頭を下げる村長。

その内容は一方的に奴隷にするという通告だった。

普通の人間ならばここで抵抗なり罵倒なりするのであるが、ミラはただ一言。

「分かりました」

とだけ言って微笑んだ。

ミラの様子に安堵する村長。

内心喚き散らされてにげだされるかとひやひやしたが、ミラは相変わらず無表情にも近い笑みをうかべるだけだった。

翌日、奴隷商人に連れて行かれるミラの姿があった。

微笑みを浮かべながら連れて行かれる姿を見て村人達はやはりどこかおかしいんだと噂する。

村長もすまない、とつぶやきながらミラを見送った。

ミラは奴隷になると聞かされても何も感じなかった。  
いや、感じなくなっていたというべきか。

長年の虐待に笑いながら耐えてきたミラの心は疲弊し、ただ笑みを浮かべる人形のような存在と化していた。

目の前で、村では随分話かけられていた男の子が血を流しても、ミラの目には一枚フィルターが掛かったように見え、どこか遠いものとして感じていた。

今のミラは馬鹿みたいに笑顔を貼り付け、周りを不快にさせないよう最低限の応答を繰り返すだけである。

何故笑うのか、それすらミラは忘れていた。

だが、そんなミラの心の歯車がずれ始めたのは奴隷が乗る馬車に連れられ、檻に入れられた時からだった。

4

目に入ってきたのは三人の子供だった。

自分とほぼ同じ年ぐらいだが、貴族の娘という称号を持ち食事には困らなかつた自分とは違いやせ細ってはいるが、奴隷になつたにも関わらず悲壮感を漂わせない三人の子供だった。

周りの雰囲気は雰囲気だけに仲むつまじい兄妹のような様子を見せる三人は馬車の中でも浮いている存在になっている。

ミラがその三人に目をやると丁度、二人の女の子が、顔中を腫らして寝そべっている男の子を挟みどちらが膝枕するかで争っている所だった。

その様子は見ていて実に微笑ましい光景だった。

始まりは静かに赤髪の女の子が自分の順当性をときだしたことだっ

た。

赤髪の子は自分が悪いからと薄い緑髪のやせ細った女の子を説き伏せようとする。

が、それにびくともせず緑髪の女の子は見た目は幼いというのに少ない言葉数で赤髪の女の子の痛いところを的確に付いていき反撃した。

思わぬ反撃に赤髪の女の子は顔をびくびくとさせるが、それをこらえ今度は自分の身体つきと緑髪の女の子の肉つきを比べ、肉付きのいい方が男の子が喜ぶということを主張した。

確かにガリガリに痩せた女の子はこちらが気の毒になるくらい骨が浮き出ている。

膝枕は少し痛いかもしれない。

さりげなく酷いことを言った赤髪の子の言葉に緑髪の子は怯むかと思っただが彼女は思いもよらぬ行動に出た。

一瞬にやりと口を吊り上げたとおもったらなんと、いきなり泣き出したのである。

赤髪の子が虐めると泣きながら、眠そうにふらふらしていた男の子の身体におもむろに抱きついたのだ。

これに対して赤髪の女の子はわなわなと震えたと思っただら、とうとう激怒した。

緑髪の女の子にのしかかり、離れなさいよと叫びながら男の子から引き剥がそうと試みる。

だが、緑髪の女の子も負けじと踏ん張り返す。

不毛な攻防が始まった。

しかし、そこで今まで何も喋らなかつた男の子がとうとう我慢できなくなつたのか眠そうな顔をこすりながら喧嘩に介入した。

大人でも手を焼きそうなこの喧嘩をこんな小さい子が止められるのかと思っただが、男の子はいきなり女の子二人の手を片方ずつ握るとくるつと身体ごと捻る。

すると、ぽすつという音を立て女の子二人は男の子の両腕の中に納まった。

え、と無意識に吐息が漏れる。

それはもう見事な動きであり、正直何が起こったのか分からなかった。

そのまま両手にそれぞれ赤髪の女の子と緑髪の女の子を抱くと男の子は寝転がる。

いつの間にか腕の中に納まっていた女の子達もこれには驚いていたが、男の子が耳元で二、三言呟くと少し不満顔を見せながら三人仲良く馬車の床で寝息を立て始めた。

素晴らしい腕前であった。

奴隷という立場に落ちたというのに三人の寝顔は健やかなものだった。

それはどこにでもある兄妹、親子にも似た光景で、『家族』という単語が頭の中をよぎった瞬間、胸の中が少しちくりとした気がした。

……自分の様子をあの男の子が伺っていたとは夢にも思わなかった。

ガタ、という音で目が覚める。

どうやらいつの間にか寝ていたようだ。

壁によりそって寝ていたため腰が少し痛む。



あの三人につられて眠ってしまったのか。

鈍くぼやける視界が晴れると、目の前にあの男の子の顔があった。どうしたんだろう、とミラが疑問に思っている。

可愛い顔立ちをした彼はミラの身体の足の方からじつくりと胸まで視線を逸らしていき、胸の辺りで顔が止まった。

そして急にぱつと顔を上げ、ミラの顔を見るなり一言。

『おっぱい揉んでいいですか？』

とたずねてきた。

.....。

正直意味が分からなかった。

初対面でこんなことを言われたのは初めてだった。

こういう時は恥じらったり、男の子の顔を叩いたりするのが正しい反応なのだろう。

それが正しい反応。

だけど、心は何の反応も示さなかった。

ただ一つ反応したのはミラの中に染み込んだ言葉だった。

どんな時も笑ってさえいればいい……。

機械的にミラの顔は笑顔を刻みこむと、口は勝手に少年に告げる。

『いいよ』

と。

それは傍から見たら異常な行為かもしれない。

だがミラの中では等しく無意味な行為だった。

どんなことをされても、求められても彼女の身体は勝手に笑顔を浮かべ従順に要求を承諾する。

世界に辛いことなどないのだから。

それはミラが二年間の虐待の中で見つけた逃避術なのかもしれないし、彼女なりの抵抗なのかもしれない。

すると少年はすっと一瞬だけ目を細めるとまたぱちりと開き、

『こんな状況でも笑顔なんだ』とだけ言ってきた。

……見透かされたと感じたのは気のせいではないだろう。

彼は今確かに自分の歪を覗き込んだ。

長く隠し通せるとは思っていなかったが、まさかこんな早くからばれるとは思わなかった……それもこんな小さな男の子に。

今まで、ミラのこの歪みを知った人は彼女から離れていった。

気持ち悪い、何を考えてるか分からないと。

この男の子も私から直ぐに離れていくだろうか。

悲しみは感じなかったが、何故か胸がざわめいた。

この胸のざわめきは久しく彼女が感じなかったものだ。

一体これは何だろうか。

分からない。

分からない。

分からない。

思考が出口のない袋小路に入ったように思える。

そんな考えは男の子に胸を揉まれた瞬間に吹き飛んだが。

『へえ、思ったよりでかいな』  
暢気に話す少年の声が遠くのように聞こえた。

「……………」  
ミラの口はぱくぱくと何かを告げようとするが、少年の予想外の行動に泡を吐くだけだった。

少年はミラが何も抵抗を見せないのをいいことに更に胸を揉む力を強めてきた。

その指捌きは実に器用で、その部分を意識したと思っただら今度は予想もできない場所責め、優しく撫でたとおもったらいきなり強く摘んでくるといった強弱合わせた技でその発育し始めた胸を弄ぶ。

「ん……………」  
見た目どおりの年齢とは思えない熟練した妙技に、未知の感覚が全身にぴりぴりと染み渡り思わず吐息が漏れる。

感じたのは熱。

胸が熱くなりそこだけぽかぽかと暖かくなってくる。

ほんのりと優しい心地よさが断続的に頭に伝わってきた。

次第に心地よさは強まる。

それと同時に何か得体のしれない恐怖がわきあがってきた。

魔物に囲まれたときでもこんな恐怖は感じたことがなかったというのに……………」

「や……………め、て」

そんな呟きが気が付けば口から出ていた。

母が死んでから、抵抗の意志を示したのは初めてだった。

いつもの彼女の笑顔は既にもろく崩れ去っている。

ミラの言葉を聞いた少年は、そのあどけなさとは無縁そうなくらい顔を浮かべると、『やつぱ、こっちが弱かったか』と呟き更なる責めを加えようとした所で……………」起きてきた赤髪の子に殴られて吹き飛んでいった。

『あんたは何やってんのよ!!』

『いや、気持ちよさそうな胸だなーって』

『死ね!!』

先ほどの雰囲気とは打って変わり、少年は赤髪の子と取っ組み合いになるとギヤーギヤー喚きながら喧嘩する。

男の子はもうあの顔ではなく普通の少年らしさを思わせる笑顔になっていた。

不思議な少年だった。

まるで何個も人格を持っているような、得体のしれない少年。

鋼のように硬かった自分の心がいとも簡単に崩された。

ありえない行動で自分の心の間をつかれた。

その存在にミラは恐怖よりも嫌悪を覚える。

彼は自分の在り方を変える危険な存在だと頭が勝手に判断し、苦手な人物と結論を下す。

ミラの心の中では今までにない混乱が起き始めていた。

5

薄暗い森の中魔物たちの雄たけびと肉と肉がぶつかり合う音が響きわたる。

その戦場の中をカルマ達は物陰に身を隠しながらひたすら奥へ奥へと進んでいく。

戦場はもはやばらばらに散らばりあちこちで戦いが行われている。

このいつ襲われるか分からない中で悠長にミラを探すのは至難の技

だといえた。  
だが、カルマには秘策があった。

魔力に目覚めた人はその身体から微量な魔力波を発している。  
これは空気中の魔素を取り込んだ際に魔力に変換する作業が脳の超  
感覚分野で行われ、完全に変換出来なかった魔力が漏出したものと  
いわれている。

ミラがこの魔力波を発しているのは馬車の中で会話したときにわか  
っている。

ならばそれを気を探るような感覚と同じように行っただけだ。

カルマは一息つくと、自分の魔力を薄く薄く森の中に広げていく。

これにミラの魔力波がぶつかるとそこに揺らぎが生じる。  
それを辿ればいいだけだ。

「見つけた」

カルマ達のいる場所から東に300メートル。

樹木が邪魔してここからでは見えないが、近くにはいたようだ。  
だが、その距離は徐々にだが離れていつている。

ミラは自身でこの戦場から離脱しようと動いてるのか。

しかしあのミラが自分で動くだろうか。

カルマは不審に思う。

カルマの見立てでは、彼女は自発的な行動というものをどこか嫌っ  
ている……いや無意識に避けているように思えた。

カルマが胸を揉んだ時も何らかの抵抗があって叱るべきなのだが、

彼女は笑いながらその行為を受け止めた。

その際、瞳に宿ったのは諦観と喜び。

面白いくらいに歪んだ感情はどのような思考を辿りそこに行き着いたのか。

前世では人間観察が趣味でもあったカルマとしては実に興味深かった。

まあ……多くの人間を見てきたカルマにはおおよそ事情を推測はできるが。

「さてさて、お姫様を迎えにいきますかね　　と」

横から襲ってきたゴブリンの斧を手の平で捌きながらカルマは虚空に呟いた。

周りに敵がないのを確認し、後ろの木陰に隠れているアイシャとノーレに手招きをする。

アイシャはいいがノーレは体力がないのでこうして少しずつ少しずつ進まないといけないのだ。

だが状況が変わり、すこし急がなくてはいけない理由が出来た。

「ノーレ、俺の背中におぶさってくれ」

「う、ん……う、めんなさい」

ノーレはカルマの言葉に、早く走れないことに対する叱責のように感じ取ったのか申し訳なさそうに謝る。

その仕草に少し罪悪感を感じ、カルマはノーレの考えを否定する。

「あー、違うんだ。　　ミラがどんどん離れて行ってるからもしかし

たら魔物にさらわれてるんじゃないかって思ったんだ」

「どづいづいとよ」

横からアイシャが疑問を投げかける。

「そのままの意味だよ。ミラが魔物にさらわれてこの速度だと見失いそうだから急ぐんだ。ノーレは無理だけど、アイシャなら走れるだろ？」

「そついうこと。なら急ぐわよ！」

アイシャはその性格故に熱くなりやすい。

すぐにカルマの言葉の意味を飲み込むと二人を置いて駆け出した。

「っておい！ そつちじゃない！ 反対だ！」

東とは真逆の西に走り始めたアイシャにカルマは叫びながら、自身もノーレを背負い東に走り出す。

「え、嘘！ ちょっと、ちょっと待ちなさいよ！」

後ろからアイシャの慌てる声が聞こえてきたが、そのお茶目な行動をからかう余裕は今はない。

（まあ後でおもっくそからかってやるけどな！）

「……お、兄様。わるい、顔してる」

意地悪い笑みを浮かべる様子はノーレにしっかり見られていた。

走り出してから一、二分ぐらいでミラは見つかった。

最も、カルマの想像通り一匹のオークに担がれて運ばれている状況だったが。

(おいおい……)

オークの方は恐らく戦いから逃げ出した逃亡兵という所だろう。生き残るために戦うという行為よりも逃げるといふ行為を選び、そのついでに偶然見つけた上玉の女も攫っていこうみたいな。

その証拠にオークは仲間や敵に見つからないように周りをキョロキョロと警戒し、碌に足元を見ていないために木の根や窪みにつまづいている。

別にそれは構わない。

逃げることも立派な戦略であるからして。

分からないのはミラのほうだ。

目が開いていることから意識はあるのは分かるのだが抵抗というものをしないで素直に運ばれている。

「まあ……いいや。とりあえず助けなきゃな」

カルマはミラの悪癖を一旦無視するとノーレを地に下ろす。

後ろから追ってきていたアイシャも止まらせると、落ちていた手ごろな石を掴みオークに向かって投擲する。

「ミラ。当たったらごめん！」

ミラに当たる可能性無視で放たれた石は果たしてオークの右肩に直



撃した。

だが、頑強なオークの身体に対してひ弱な子供の力で投げられた石は大きなダメージを与えるには至らない。

が、それで十分だった。

周りを警戒していたオークは石がぶつかった瞬間、びくつと身体を震わせ足を止める。

そして振り返ろうとした瞬間を、魔力で身体強化したカルマが刹那の間で接近しその喉を手刀で一突きした。

「ガアッ！」

オークの口から鮮血と共に断末魔の叫びが漏れその命を終わらせる。カルマはオークの喉から血にまみれた手を引き抜くと、近くの木から葉をむしとり血を拭い取る。

そして呆けているミラの顔に目を向ける。

その表情にいつもの笑みはなく、むしろカルマを見る瞳に僅かなおびえが見えた。

その様子を見てカルマは自分の作戦が成功しつつあることを知り内心喜ぶ。

馬車の中でかけたモーションは失敗ではなかったようだ。

「大丈夫？」

カルマはわざと顔を近くしてミラに声をかけた。

前世では悪魔のような性格と称されたのは伊達ではない。

彼女の中に芽生えだしたカルマに対する苦手意識を煽るのは赤子の手をひねるより簡単なことだった。

「だ、大丈夫だから」

ミラは取り繕うように笑みを作るとカルマから一步はなれた。その拳動から、魔物に襲われていても眉一つ動かさなかったミラの動揺具合が見てとれる。

「大丈夫ってことないだろ？ ほら魔物にも攫われてたしい？」

にやにやと趣味の悪い顔をしながらカルマは更に身体を近づけた。おまけとばかりにミラの顔を両手で挟み、ぐいっところちらに引き寄せる。

「どっか傷ができてそこから病気になったら大変だろ」

「本当に大丈夫だから！」

どん、と軽い感触と共にカルマの身体は後退する。

ミラの二度目の抵抗だった。

その瞳は恐怖と嫌悪が占めている。

カルマを突き飛ばした本人は一瞬自分が何をしたのか分らないとばかりに両手を眺めるとそのまま後ろの木に寄りかかり、静かにうづくまつた。

そして頭を抱えながら何かをぶつぶつと唱えだした。

「わ……え。わ、……ら……わ、え」

「お、おーい。 ミラさん」

ちよつとやばい様子のミラについやりすぎてしまったかと危惧する。とそこへ

「ちょっと、何してんのよ！」

カルマとミラの一連のやり取りを見て後方で待機していたアイシャが叫びながら駆けつけてきた。顔は赤く蒸気し、憤慨の表情を示していた。

「いや、ミラの身体に怪我がないかだな……」

「だからってあんなに顔近づけなくてもいいでしょ！？ これだから男は！」

お前はどこかの委員長か……と思わず呟きそうになったが何とか飲み込む。

今、ここで茶々をいれると厄介なことになりそうだったからだ。なんかやり過ぎす良い方法はないか、とカルマが視線を一周させた時丁度良いものが見つかった。そして誤魔化すように後ろを指差す。

「ほ、ほらアイシャ。 向こうから敵がきてるぞ〜」

「えっ！？ ってそんなのに引つかかるわけないでしょ！ 馬鹿なんじ」

「いや、わりとマジで」

「えっ！？」

アイシャが振り返るとそこには、

「ほ、ほんとにいっぱいいる……」

ゴブリンやオークだけではない。  
蜘蛛型にワニのような外見、他にも見たことない種類の魔物が周囲から迫りつつあった。

戦場で流れた血に加え、アイシャの大きな声は森の中の魔物を呼び寄せていたのかわらわらとその数を増やしていく。

サーと青い顔になるカルマとアイシャ。

二人は恐る恐る顔を見合わせると

「逃げるか」

「逃げましょ」

一分の反論の余地もない互いの意見の一致。

カルマは未だに目が虚ろなミラを担ぎ、アイシャも無言でノーレを背負う。

状況判断の早いアイシャとのコンビだからできる無言の連携だった。

「俺が走りながら前の敵をできるだけ削いでく！ お前は絶対に俺の後ろから離れるな！」

「分かった！」

カルマは右手にあるオークから奪った大振りのナイフを構えると敵が薄そうなる場所を即座に知覚。

殺気を限界まで放出し魔物を威嚇しながら足を踏み出した。

「ハッ！」

一閃。

最初に立ちふさがったオオキリ蜘蛛の頭部を一刀のもとに切り裂き、

次にその斜め後ろにいたジュエリーポップに蹴りをいれアイシャの進路を確保する。

次々と切り裂かれていく魔物たちに数匹の魔物は太刀打ちできないと悟ったのかカルマたちから離れていく。

だが、それでも四人を追う魔物は尽きない。

『万物の森』の名は伊達ではなかった。

「クソツ！ キリがないな。 アイシャ、大丈夫か！」

「ゼーゼー、だい、じょうぶ、なわけ、ないでしょ！」

「そっか！ ならまだ行けるな！」

「ちょ、ほんとに限界、なのよ！」

走り出してから数分。

肩で息をし呼吸を荒くする彼女の言葉には真実味が増していた。

魔力で身体強化しているカルマならまだミラを担いでいても余裕があるが、生身のアイシャでは、小柄であってもノーレを担いで走るのには限界があるのだ。

カルマは悩む。

「うーん、そろそろ限界か。 でも正直ここで魔力を使い果たすのは厳しいしなあ……」

悩んでいる間もアイシャの体力は刻々と減っていく。

しかし、ここで全力を費やして逃走しても地理がない彼らでは目的地が設定できないのだ。

これではゴールのないマラソンを走るようなものだった。

だからカルマは選択を委ねることにした。

「なあアイシャ、ノーレ」

「何よ」

「な、に……」

「じりじりと死ぬのと、一発どかんと死ぬのどっちがいい？」

あえて抽象的に話したのは少し弱音が漏れてしまったのかもしれない。

男として情けなく思うが、この状況で全員守れる保障はどこにもなかった。

この状況で訳もわからない二人に選択を委ねるのは卑怯だとも思うが、せめて死ぬ可能性があるなら選択させてあげたかったのだ。

「そんなの一発どかんにきまつてるじゃない」

「私は、お兄様の、……好きなほう」

二人は躊躇いもせずに答えた。

彼女達らしい答えにカルマから笑みがこぼれる。

横でその笑みを意味ありげにミラが見ていた。

「じゃあ、一か八かのでつかい賭けと行きましようかね。死んで

も後で文句は言っなよ？」

「勿論」

「う、ん……」

二人が頷くのを見届けるとカルマは急停止した。

そして右肩にアイシャ、左肩にミラ。

背中にノーレをしがみつかせると、一気に魔力を脚を中心に循環させ太股の辺りで流れを抑えた。  
身体強化の基本は魔力の循環だが、一部の流れを塞ぎ止めることで解放された時の魔力は数倍の強化を与える。  
代償はそれなりにあるが今こそ使う時。

「うっし、行くぞ！」

掛け声で脚にたまっていた魔力を爆発させる。

瞬間、景色が前から後ろに流れていった。

追ってきていた魔物たちに視覚の追従すら許さず、カルマは三人を担いだまま森の中を高速で進んでいく。

(予想以上にきついな……)

今、四人合計の体重は百キロ近い。

カルマの魔力量と力の消費具合から考えてあと五分もてばいいといったところだった。

(さて吉と出るか凶と出るか……)

この先に更なる強敵が出てきたら、待っているのは確実な死だ。

もし身体を長時間休ませられる所ならば生。

まさに一か八。

その結果が五分後に待っていると思うと無性に楽しくなってくる。  
前世でもギャンブラー気質があった彼はこうしてスリルを感じると異様にテンションがあがるのだった。

「ひゃっほー！ー！ー！ー！」

まだカルマ達の逃走劇は続きそうだった。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2781ba/>

---

奴隷と迷宮とあと何か

2012年1月14日06時48分発行